小学校外国語学習導入期における英語絵本を活用した授業に関する実践研究

鳴門教育大学大学院教育研究科　指導教官　畑江　美佳
本山町立本山小学校　教諭　三本　祐加

1　はじめに

現在、小学校高学年の外国語活動が導入されて 7 年目となり、平成 32 年度からは第 3・4 学年で外国語活動が、第 5・6 学年で外国語科が必修となる。高学年では外国語の教科化に伴い、読み・書きに関する指導内容が明記されるなど、基礎的な言語技能を活用してコミュニケーションを図るという以前のものからレベルアップした内容が目標に掲げられている。

高学年外国語科への円滑な接続に向けて、中学年では外国語に十分慣れ親しんで学習への動機づけを十分高めるということが求められている。そこで本研究では、小学校外国語学習導入期に当たる中学年に焦点をあて、さらに、楽しく外国語に触れると同時に積極的に学習を進めていこうとする態度を育成するために英語絵本の活用に注目した。

英語に慣れ親しむ課程において、英語絵本活用は『Hi、friends! Plus』に絵本（物語と挿絵）型補助教材が掲載されていることからも、以前より注目されてきた。

しかし、その効果が期待されている一方で、うまく活用できていないという現状も報告されている。文部科学省が全国の小学 5・6 年生、約 2 万 2 千人を対象に行った調査（平成 26 年度　小学校外国語活動実施状況調査・調査実施時期　平成 27 年 2 月）によると「英語の絵本を読んでもらうのを聞くこと」は好きかどうかという質問に対し、一番多い回答は 40.2%の「授業でやってないと思う」というものだった。外国語活動の課題としてあげられる「教材・教具の開発や準備の時間」という点においても絵本の活用は教師の負担になりにくく、且つ児童が楽しく英語を学習する体験をさせることも期待できる。

2　研究の目的

本研究の目的は、小学校中学年での英語絵本活用における（1）児童の情意面（2）音声のインプット（3）内容理解に与える影響を、授業実践より検証し、外国語活動における、英語絵本の教材としての可能性を探ることである。

3　研究内容

(1)　先行研究の概観

ア　第二言語習得論からみる絵本活用

村岡（2003）は第二言語習得学の観点から小学校外国語活動における絵本使用が有効である理由の 1 つとして「絵を見ることで、ストーリーの内容を、日本語を介することなく英語で英語を理解することができる」ということを挙げている。また、Krashen（1985）のインプットの適正条件「input+1」は学習者に「既に理解できるインプットを与え続けても習得が促されることは無く、全く理解できないインプットを与えても、解説がなければ一切理解されず、意味解釈過程が

生じないので習得を促進しない。」ということを示しているが、これを絵本の読み聞かせに当てはめると、挿絵は子どもたちが内容を理解する上で大きなヒントとなり得る（松本、2015）と言える。さらに、アレン玉井（2010）は大人と対照的に子どもは言葉を全体として把握していく能力が高いといわれているので、発話される英語の意味がすべては理解できなかったとしても、挿絵を同時に取り込むことで絵と音をつなぎ、意味理解へと進むことができると言う。

イ　絵本の特徴と教材としての利点

Wolfenbarger & Sipe（2007）は絵本（picturebooks）を次のように定義する。“Picturebooks represent a unique visual and literary art form that engages young readers and older readers in many levels of learning and pleasure.”（絵本はユニークな視覚的、文学的芸術形式をもって、若年の読者または年配の読者達を多様な学習段階や喜びへと引き込む。）（引用者訳）また Arizpe & Style（2003）は絵本について“(picturebooks are) not books with illustrations、but books in which the story depends on the interaction between written text and image and where both have been created with a conscious aesthetic intention(not just for pedagogic and commercial purposes)” (絵本の物語というのは書き言葉と描写の相互作用に拠っており、両者は（単に教育学的、商業的な目的のためではなく）意識的、美的感覚のある意図をもって創造されなければならない。) （引用者訳）と指摘している。絵本は短文であり語彙数が少ない＝子ども向けであると思われがちだが Wolfenbarger ほかや Arizpe ほかが言うように、年齢を問わず読み手を惹きつける芸術性の高さをもっているのである。

また、外山（2010）は教材に英語の絵本を使うことで学習者への様々な効果が期待されるとしているが、そのような教材に適した英語絵本の特徴として「豊富なライム」、「自然な繰り返し」、「動機づけを高める」、「異文化に触れることができる」などを挙げている。

また、一般的に英語の読解や聴解を得意とする者は、言語知識に加えて推論する力を持っており、それにより文全体の理解に至ることが多いと天満（1989）は述べている。佐藤・佐藤（2010）らは小学生に英語絵本の読み聞かせを行い、その理解過程と読解ストラテジーについての検証を通して、小学生にも推測する力が備わっているとしている。

しかし児童が個々に使うストラテジーが異なっている点や、そのために生じる内容理解の差を考慮し、同氏らは考察の最後で「絵本の読み聞かせを行う時は、絵に注意を払うだけではなく、よく聞き、少しでも既知語を聞きとるように児童を仕向けることが大切である。さらに、ストーリーに直接係わらない絵について質問することは避け、むしろ、前の場面と内容を比較しながら推測させるなど、様々な手掛かりを組み合わせて利用することが勧められる。」と述べている。さらに、「読む際には、抑揚や声の大きさもヒントになるので、感情を込め、動詞を理解させるためにジェスチャーを用いて読むことを勧めたい。」とも述べている。このように、児童が本来持つ推測する力に働きかける読み聞かせを意図的に行うことで、その力をさらに育むことができるのである。さらに、読み聞かせによって推測する力を養うことは将来の英文読解・聴解力にもつながることが期待される。

ウ　絵本の活用方法

本調査ではリードアラウドという方法を採用した。リードアラウドとは英語の read aloud（音読す

る、朗読する）に由来する言葉であり、「英語絵本を、子ども自身が、声に出して豊かな表現で読むこと、その指導方法である（大島、2011）。読み聞かせとの大きな違いは、子ども自身が声を出して読むという点である。こうすることによって、教師と聞き手である生徒との間に関わりが生まれる（Omar & Saufi、2015）ほか、児童が学習へ向かう動機づけに繋がっている（大島、2011）。

エ　中学年児童と外国語学習

中学年期における児童は、低学年にあたる児童的特徴から脱し、思春期的特徴をもちはじめる転換期であるといえる（杉原・河合・高野、1987）。外国語学習においても、低学年のように教師の英語をただ真似て応答するような活動に積極的に取り組む様子は、次第に見られなくなる。だが一方で、いろいろな課題に自主的に取り組んだり、英語で表現したいという気持ちが芽生えたりする時期であると言える。その特徴を生かし、少し複雑なゲームを取り入れる、自分で判断して英語で返事をするなどのステップアップした活動を授業に組み込むことが望ましい久埜（2001）。

オ　発達段階に合わせた絵本選択について

大島（2011）はリードアラウドする際の絵本選択の基準として「見た目」と「読み心地」を挙げている。これは英語初心者や初級者の心情を考慮しての基準であり、絵やデザインから「面白そう」「格好いい」「きれい」という印象を与えることがまず大切であるとしているからである。また、絵だけではなく文字の見た目も意識しており、文字が 3 行程度であることや、文字が絵のようにデザインされているものについてはさらに読者が受けるストレスを軽減することができるとしている。もう一つの「読み心地」とは「繰り返しや押韻などで、心地よいリズムが感じられるか」や「読んだ内容に感動や驚きがあるか」ということをさす。

(2)　調査

ア　調査目的

小学校外国語教育の導入期にあたる中学年（第 3･4 学年）において、英語絵本を活用した授業が児童の情意面、学習面（リスニング・スピーキング）に与える影響を検証し、英語絵本を活用したリードアラウド活動の教育的効果を明らかにすることである。

イ　調査対象・調査期間

対象：高知県長岡郡本山町立本山小学校第 3 年生 11 名、第 4 年生 13 名の児童 24 名。

期間：平成 30 年 6 月 1 日～ 6 月 29 日

ウ　実施内容

同じ英語絵本を用いて、読み聞かせ及びリードアラウドの活動を 3 回実施する。実施は週 1 回の外国語の授業の前半 15 分程度を使って行うものとする。活動を通して、絵本で用いた英語の意味理解がリスニング・スピーキングレベルで定着したかどうかを最後の授業から一週間後、テストによって検証、また情意面の変化をアンケート調査で考察する。

エ　調査方法

(ｱ)　アンケート調査

事前調査では英語への興味関心、英語学習経験の有無、英語絵本を読む経験の有無などを問う。事後調査では事前調査と同様に、英語への興味関心を問うことで活動を通しての意識の変化を検証する。加えて、英語絵本や活動への児童の意識を問う項目、また感想を自由記述形式で書く項目を設けた。選択回答形式の回答方法は、4 段階とした。

(ｲ)　リスニング調査

聞こえた英語に合う挿絵を 4 枚の中から 1 枚選ぶ形式をとる。分からない時は「分からない」という項目を選ぶ。音声とイラスト（意味）を結び付けることができているかを見る。1 問 1 点で全 6 問、6 点満点とする。

(ｳ)　スピーキング調査

絵本の挿絵を見せて、その場面に合った英語を言うことができるかどうかを一対一のインタビュー形式で検証し、3 回の活動の中でどの程度アウトプットするまで定着したかを見る。

オ　調査結果と考察

(ｱ)　児童の情意面における分析結果と考察

分析ソフト SPSS「対応のある *t* 検定」を用いての比較検証を行った。 *t* 検定の結果、各質問項目の有意確率はすべて $P > .005$ となり有意差は見られなかった。つまり、調査授業の前後で児童の英語に対する意識の変化はなかったということである。さらに、効果量からも意識の大きな変化は見られなかったといえる（表 1）。

表1　各質問における事前事後の変化（ *t* 検定による分析結果）

質問項目	*M*	*SD*	*t*	*F*	*P*	*r*
英語が好きである	-.333	.637	-2.563	23	.017	.47
英語を聴くことは楽しい	-.042	.690	-.296	23	.770	.06
英語を話すことは楽しい	-.083	.584	-.700	23	.491	.14
英語でALTの先生と話すのが好きである	.042	.690	.296	23	.770	.06
英語の歌やチャンツを聞いたり、歌ったりするの好きである	.083	.881	.464	23	.647	.10
英語の本は難しいと思う	-.208	.658	-1.551	23	.135	.31

(ｲ) リスニングにおける分析結果と考察

分析にはノンパラメトリック検定の中で「対応のある 2 つの群の中心位置の違いを検定する」ことに適した、Wilcoxon の符号付き順位検定を採用する。分析結果は表 2 の通りである。漸近有意確率（両側）が.000 となり $p < 0.01$ を満たしているので、「事前テストの得点の中心分布が事後テストの得点中心分布と同じである」という帰無仮説は棄却される。よって、授業前と授業後では（中央値を比較すると）有意な差があるということができる。さらに、効果量＝-.75 のよう

に算出された。以上より、絵本を用いた授業を通して児童は英語音声の意味を理解できるようになったということができる。

表 2　Wilcoxon の符号付き順位検定の結果

	度数	漸近有意確率（両側）	Z値	効果量
事前	24	-	-	-
事後	24	.000**	-3.655	-.75

**p =.000

(ｳ) スピーキングの分析結果と考察

スピーキングテストの結果、ほとんどの問題において回答できた児童の数は非常に少なかった（表 3)。15 分×3 回という限られた時間の中では、アウトプットにまでつなげるほどの十分なインプットが与えられたとはいえないことが分かる。また、テストの結果やインタビューの観察から、多くの児童が絵だけではなく文字に頼って回答する様子や繰り返し出てくる表現は文字で認識していたこと、日本語に似ている表現（問題 7 の gum など）は覚えている児童が多いことが分かった。さらに、語数やリズムが回答者数に影響しており、必ずしも少ないから覚えやすいわけではないことも分かった。

表 3　スピーキングテスト結果

	正答	正答者数
問題 1	“Shhhhhh!”	16
問題 2	“David You’re tardy!”	2
問題 3	“Sit down、David!”	2
問題 4	“David! Recess is over!”	1
問題 5	“PAY ATTENTION!”	9
問題 6	“Good JOB、DAVID!”	5
問題 7	“Don’t chew gum in class!”	2

(ｴ)　事後アンケート結果と考察

事後アンケートでは、以下の質問を行った。各質問の結果は図 1〜4 の通りである。

アンケートの結果、絵本を使った活動を「とてもかんたん」または「かんたん」であったと回答した児童が 10 人であるのに対し、「少しむずかしい」または「むずかしい」と答えた児童は 14 名であり、半数以上が英語絵本は難しかったと感じていることが分かった（図 1)。

しかし一方で「英語の絵本を使った活動が楽しかった」と肯定的に捉えている児童が 23 名いた（図 2)。さらに、「英語の絵本をもっと読んでもらいたいと思いますか」という質問に対しても 21 名が「とても思う」または「思う」と答える（図 3）など、英語絵本を使った今回の実践をむずかしいとは感じながらもその中に楽しさを見いだして活動をし、結果英語の絵本に対しても好意的な印象が残っていることが分かった。

表４　事後アンケート質問項目

質問７	「デイビッドがっこうへいく」を使った活動はかんたんでしたか、むずかしかったですか。
質問８	英語の絵本を使った活動は楽しかったですか。そのわけも書いてください。（自由記述）
質問９	英語の絵本をもっと読んでもらいたいと思いますか。
質問 10	英語の本を自分で読めるようになりたいと思いますか。
質問 11	絵本を使った活動の感想を自由に書いてください。（自由記述）

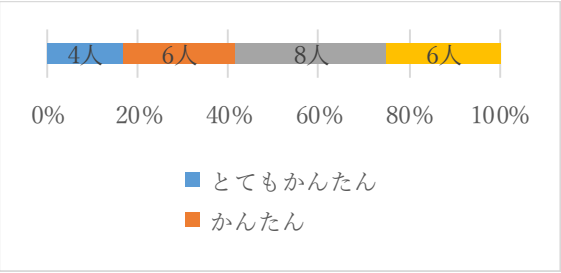

図１　質問７の結果

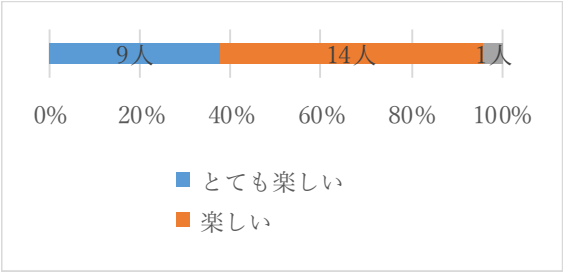

図２　質問８の結果

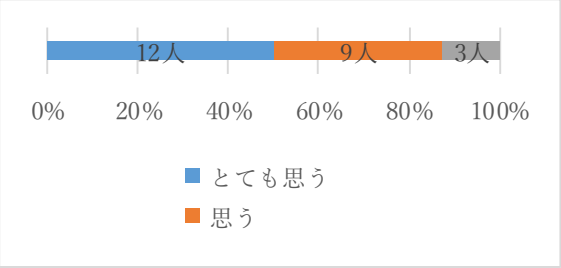

図３　質問９の結果

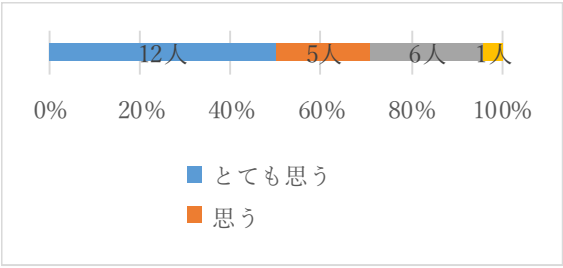

図４　質問 10 の結果

(ｵ) 事後アンケート自由記述の結果と考察

２つの自由記述形式の回答からは、児童が英語絵本を使った活動を楽しんでいたことが分かった。主に、絵本教材の内容（ストーリーやキャラクター、挿絵）や、リードアラウド活動で友達と一緒に活動したことにおもしろさを見いだしていた回答が目立った。また、「英語の本が分かるようになった」、「英語を話すことができた」のように、英語に対する成功体験をし、自信につながっている回答も多かった。

カ　調査のまとめ

スピーキングテスト結果からはアウトプットするまでに英語が定着したとは言えなかったが、リスニングテストでイラストと英語の音を結び付けられるようになったことや、絵本に掲載されている英語文字を見ながら活動をしたことで、「英語を覚えられた」「文字が読めた」と感じた児童もいた。このように完璧に英語がすらすら話せたり文字が読めたりしなくても、児童は小さな「できた」体験を重ねており、そこから今後の英語学習につながるような態度（今回の実践で言えば「楽しかった」と振り返っている児童が多いこと）の育成につながっていると言える。

４　まとめ

本研究を通して英語絵本の活用は、楽しく英語に慣れ親しませることができる、聴いた英語の音の意味

理解につながっている、英語絵本を用いることで文字へ興味を持たせるきっかけをつくることができる、一方的ではない教師と子ども、さらには子どもと子どもの相互の関わりを生み出すことができるなどの教育的な利点が明らかとなった。しかし、スピーキングテストの結果からも分かるように、数回の活動ではアウトプットするまでの十分なインプットが与えられたとはいえない。つまり、英語絵本を活用することの意義は児童の英語学習への動機づけを高めたり、たくさんの英語を聞き慣れたりするという側面が強いと結論づける。

また、英語絵本を教材として活用するには、時間や読み手の確保、発達段階にあった絵本選択などの課題が残る。しかし、先にも述べたように教材としての英語絵本のよさは無視することはできない。小学校外国語学習で英語絵本の活用を積極的に進めていくために、上記の課題に対しての対応策を考え、実践してくことが重要である。

＜参考・引用文献＞

アレン玉井光江（2010）『小学校英語の教育法　理論と実践』大修館書店.

Arizpe、 E. & Styles、 M. (2003). *Children Reading Pictures: Interpreting Visual Texts*. London: Routledge.

久埜百合（2001）「小学校の英語学習を支える指導方法と教材」、樋口忠彦・行廣泰三（編著）『小学校の英語教育-地球市民育成のために-』KTC 中央出版.

Krashen S. D. and Tracy D. Terrell. (1985). *The Natural Approach Language Acquisition in the Classroom*. San Francisco: Alemany Press.

松本由美（2014）「初期英語教育における絵本の有効活用－児童の自発的反応を引出す「読み聞かせ」の試み－」玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要、第8号、pp.35-42.

村岡有香（2013）「日本の小学校におけるストーリーを生かしたプロジェクト型外国語活動」恵泉女学園大学紀要、第 25 号、pp.71-91.

文部科学省（2014）『小学校外国語活動実施状況調査の結果［概要］』Retrieved on April 15th 2018 from http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2015/09/24/1362168_01.pdf

大島英美（2011）『声に出して読む英語絵本初めてのリードアラウド』中央公論新社.

Omar、 A. and Saufi、 M. M. (2015). “Storybook Read-Alouds to Enhance Students’ Comprehension Skills in ESL Classrooms: A Case Study.” Dinamika Ilmu、 Volume 15.

佐藤久美子・佐藤綾乃（2010）「L2 小学生の英語絵本の理解過程と読解ストラテジー」小学校英語教育学会紀要、第 10 号、pp.43-48.

Shannon、 D. (1999). *David goes to school.* Blue Sky Press.

外山節子・入江智子・坂井邦晃・佐藤貴子・渋谷徹・藤澤京美（2010）『小学校の外国語活動で成果を上げる指導案付き英語の絵本活用マニュアル』コスモピア.

杉原一昭・河合芳文・高野清純（1987）『３年生の発達のとらえ方と指導』教育出版.

杉原一昭・河合芳文・高野清純（1987）『４年生の発達のとらえ方と指導』教育出版.

天満美智子（1989）『英文読解のストラテジー』大修館書店.

Wolfenbarger、 C. D. & Sipe、 L. (2007). “A Unique Visual and Literary Art Form: Recent Research on Picturebooks.” Retrieved on July 1st 2018 from http://repository.upenn.edu/gse_pubs/32